巻　頭　言

この３年にわたる新型コロナウイルス流行下にあって、私達はさまざまな努力を払って事態に対処しつつ馴染んできた。学校教育はもちろんのこと、家庭生活・社会生活の全体にわたって必要なかぎりの感染対策をつねに意識し実践できるように、私達は学び合い、伝え合い、そして協働を重ねてきている。状況は社会の分断をもたらしもするが、それと同時に私達はまた、もう一度共同体のあり方を練り直す取り組みを分かち合えてもいるのだろう。

しかしこの１年にわたる覇権主義的な侵略行為の影響下、世界はさまざまな危機に直面し、すでに存在していた諸問題をいっそう悪化させてきた。被害を受けている方々の生命と尊厳、財産、共同体はもちろんのこと、人類がこれまでの歴史を通じて生み出し私達も共有している理念と価値をも毀損しようとする暴力に対して、私達は対処しなければならない一方で、これにただ馴染んでしまうことには注意し続けなければならないだろう。もっとも、そのような問題を忘れずにいることや、自らの足元が揺らぐ感覚に馴染まずにい続けることは、言葉で語れるほど容易なものではない。しかし例えばコメニウスがヨーロッパの戦乱のなかで時代のありように馴染むことなく、ありうべき知と教育とを生涯かけて探究した姿は、人間存在への信頼をもって学び続ける者の矜持を、現在の私達に伝えてくれているように思う。

今回第 15 号を迎えた『学習開発学研究』が、そのような姿勢を受け継いでいく多様な探究の成果を交流し、これからの時代を支える知と学びと教育の創造に取り組む協働の場のひとつとして発展していけるよう、皆様からのお力添えを頂ければ幸甚である。

令和 5 年 3 月

広島大学大学院人間社会科学研究科
学習開発学領域主任
山内　規嗣